

『拾玉集』における叡山仏教

渡 邊 守 順

序

『拾玉集』は、流布本の『六家集本拾玉集』によると、京都の青蓮院門跡で、天台座主でもあった尊円法親王がまとめたもので、その奥書によれば、貞和二年（一三四六）の成立である。慈円の寂後一二〇年目のことであつた。六家集とは、俊成・良経・定家・家隆・西行・慈円の六人の歌集をいう。『後鳥羽院御口伝』に慈円は「西行がふりなり」とあり、『為兼卿和歌抄』にも、「先達のよまぬ詞をもはぶかる所なくよめる事は、入道皇太后宮大夫俊成・京極入道中納言・西行、慈鎮和尚などまで殊におほし」とあり、慈円（慈鎮）は一流の歌人と評価されていた。『拾玉集』には、流布本と少し内容の違う『異本拾玉集』があり、その初巻奥書に「嘉（観）か」応三年（一三五〇）とある。そして、飛鳥井雅章書写の『拾玉集』もある。

本稿は校注国歌大系本の『拾玉集』を中心に考察する。こ

の集は、慈円の生涯にわたる和歌の集大成であるから、所収の約四千五首のすべての作品が叡山に深い関係がある。そこで、『拾玉集』の叡山仏教を論ずるとき、そのすべての作品を対象にしてもよいが、比叡山・天台教学などが具体的に詠みこまれた四百首余をとりあげ、慈円の叡山天台和歌の特色を探ってみたい。多賀宗隼氏の研究によれば、『拾玉集』とその他の和歌を数えると約六千首あるという。それらは当時の歌壇において高く評価された。日本和歌史上、輝く釈教和歌を多く残された。それが、比叡山・天台教学を主題としている。それは日本文化史上、いかなる意義をもつのかを明らかにしたいのである。

慈円の和歌については、多賀宗隼氏や間中富士子氏の研究がある。間中氏は『拾玉集』に「百首詠」のあることに注目され、全作品を次のように分類された。

内的事象の歌（庵室生活・述懐・無常・厭離・釈教・神祇・懷郷

・旅・恋・祝）

『拾玉集』における叡山仏教（渡 邊）

外的事象の歌（月・雪・花・鐘・竹・四季・草花・動物）

贈谷歌（後鳥羽院・後京極良経・九条兼実・藤原俊成・藤原定家

・寂蓮法師・静賢法師・源頼朝）

この分類もそれなりに慈円の教養の広さを示しているが、天台高僧の生涯を詠んだ和歌の分類としては、内容の上から、釈教歌を比叡山（地方の天台寺院も含む）・法華経・台密・摩訶止観・大乘菩薩戒・天台淨土教・神仏習合に分けるのが、慈円和歌の本質を明らかにすると考えた。そして、自然詠に関しては本稿では扱わずに省略した。

一

まず、『拾玉集』に登場する比叡山と天台地方寺院を詠んだ和歌を例示する。

世の中に山てふ山は多かれど山とは比叡の御山をぞいふ^③
右は慈円の代表的作品で、もっともよく知られている。

とにかく身にしむものは神垣や比叡の山風水の川波

其のなかに頼む心の深きかな南の山の月の明王

「南の山」とは比叡山の無動寺のことで、詞書に「千日の山ごもり」とあり、仁平三年（一一五三）に師の覚快法親王が検校になったとき、慈円が無動寺の千日入堂の修行を行ったので、その頃詠まれた和歌が多い。

比叡の山雪の窓打つ物やなに見残す法も嵐なりけり

比叡の山は冬こそいと寂しけれ雪の色なる鶯の杜より

文治五年九月寂蓮入道の許へ無動寺より遣はすなり

思ひ知りて思ひおこする人もがなみ山の秋に返る心を

慈円の千日修行は嵐を冒し雪を凌いで精進だったが、その難行苦行に挑戦したとき、叡山では学生と堂衆との紛争と乱闘が起った。

法の水の浅く成り行く末の世を思へば悲し比叡の山寺

大嶽の峯さがしく吹く風をしづめずばいさ法の灯火

しのぶべき人もあらしの山寺にはかなくとまる我心かな

叡山仏教史に特筆される僧兵の争乱のなかで、修行に励む慈円の心境はじつに多くの和歌となった。

比叡の山いづより風の凍りけむ都は今朝ぞ初雪の空

立つ杣や月の雪居に宿しむる心を磨く峯の秋風

慈円は叡山仏教の危機を救うために、建久三年（一一九二）に座主に就任し、さらに、二度目の座主に建仁元年（一二〇一）に任じ、三度目は建暦二年（一二二二）に就任した。

逢ひ難き中に近江の山高み三度来にける身を如何せん

慈円の比叡山の歌は単なる庵室生活を詠んだものでなく、仏教の衰退を慨き、仏法の興隆を願うものであった。

地方の天台寺院とかかわる作品も多い。西山隠棲に關して、「承元二年（一二〇八）西山前なる紅葉するを見て」という和歌がある。西山とは善峯寺のことで、同寺には慈円の入

寺したことを伝え、慈鎮和尚墓がある。

はる雨にわかかえてとて見し物を今は時雨に色かはりゆく

西山に住侍ける頃むしをきゝて

草ふかき宿のあるじと諸共に浮世を侘ぶる虫の声哉

つぎに四天王寺別当時代の歌も多い。承久元年(一二一九)

には四天王寺に百首和歌を献じている。

難波津に今ははるへとながむればにしにひらけてさくやこの花

難波津に人のねがひをみつしほはにしをさしてぞ契をきける

身を分けて鶴の林を出でしより亀井に映る有明の月

亀井は四天王寺境内に現存する。以上のような慈円の比叡

山や天台寺院の風景詠は慈円の生涯の足どりを如実に示して

いる。

二

ところで、慈円和歌の本質は天台教学をテーマとする和歌と考えられるので、その全体像を、円密禅戒念に分けて述べる。

① 法華円教 法華経に関する和歌^③としては、ずばり法華経の各品を詞書とした和歌がある。その一部を例示しよう。

序品 九首のうち「如是我聞」

我聞くと伝ふる人の微かりせば争て仏の法を知らまし

仏には終に成るべき身にしあれば法の花をも我聞くとして

方便品 十五首のうち「諸法実相」

『拾玉集』における叡山仏教(渡邊)

津の国の難波のことも誠とは便りの門の道よりぞ知る

譬喩品 六首のうち「猶如火宅」

年古りて朽ち行く宿に燃ゆる火は悟らぬ程の栖なりけり

信解品 十首 藥草喩品 四首

授記品 二首 化城喩品 六首

五百弟子記 三首のうち「法華最第一」

思ひきや八百万世の法の中に勝れて匂ふ花を見むとは

宝塔品 八首

提婆品 六首のうち「龍女成仏」

玉故に出でぬと見えし海の目やがて南にさし昇るかな

勸学品 三首 安樂行品 五首

涌出品 四首

寿量品 八首のうち「得入無上道」

み山路や惑ひ惑はず行き行かず思ひ知ること知るべなりけれ

分別功德品 二首 隨喜功德品 一首

法師功德品 五首 不輕品 二首

神力品 三首 嘱累品 三首

藥王品 十一首 妙音品 二首

觀音品 七首のうち「便得離欲」

根に生ふる罪と聞きしも君が為離るとするも嬉しかりけり

陀羅尼品 四首 嚴王品 三首

勸發品 六首

以上一三八首の法華経を詠んだ和歌があり、慈円の理解度とその表現の作品評価をしなければならぬが、とにかく、深

遠な教義をやさしい文学に昇華させた点は賞讃してよい。

② 台密 慈円は十三歳で出家し、まず、密教を学び、三部の大法を受け、護摩の行法を修しているの、密教和歌がある。

金剛部

頼もしな浮世の中はやぶれ屋に独り碎けぬ法の里人

羯磨部

密の矢を高間の了に差しあげて顕密の的に引き外しつる
護摩の火の灰なき灰に種蒔きつる種は薄きものかは

慈円の全和歌からすると多くはないが、関心の深さを示している。

③ 止観 天台宗の年分度者は止観業と遮那業に各一人宛であった。慈円も当然のことながら止観を修した。その一例を示そう。

目を閉じて息を教ふる心には御法ばかりの残るなりけり
密教の和歌より、止観を詠んだ歌はさらに少ない。

④ 大乘戒 無動寺の千日入堂などの修行において、花を供え、闍伽（清水）を汲んで、持戒と精進のあけくれであった。

三年までみのりの花をささげつつ九品をも願ひつるかな
いっとなく動かぬ君につかへても心はよみにあくがれにけり
この歌で「君」というは無動寺の不動明王のことで、五欲

の境に遊び、制し難い心境を告白したものである。

⑤ 天台浄土教 慈覚大師が五台山の念仏三昧法を叡山に導入して、不断念仏を伝えてから、恵心僧都の『往生要集』がまとめられ、一心三観の観行と阿弥陀念仏が一体となり、叡山浄土教が発展した。その影響を受けて慈円の念仏和歌が数多く詠まれた。

とことほに思ふことを尽きもせぬ欣求浄土と厭離穢土とを
立つ杣や南無阿弥陀仏の声引くは西に誘ふ秋の夜の月

弥陀四十八願

眺めかはす四方の浄土の光かな我が極楽の望月の空
このほか巻五の跋文に「恵心院の源信僧都もこれを取りなし」とあるごとく、阿弥陀信仰の和歌は法華経歌について多い。

⑥ 神祇 叡山の天台の思考の中で、特記すべきものに、本地垂跡・神仏習合がある。日吉百首は法華経百首とともに、慈円の和歌を論ずるとき、無視できない存在である。

我が頼む日吉の影は奥山の柴の戸までもささざらめやは
おしなべて日吉の影は曇らぬに涙あやしき昨日今日かな
日吉のや杉の印と更に言はず折あはれなる住吉の松
今こそは思ひ合はすれ日吉のや杉のしるしも住吉の夢
人毎に得て嬉しきは法の花御代の仏の宿のものとて（。印は「ひえのみや」を示す。）

「住吉」は大阪四天王寺に住した慈円なので住吉大社のことである。神仏習合こそ日本で天台（外来文化）が発展し、そうすれば世のため人のためになるという思考で、神祇歌が多く詠まれたのである。

このほか、天台と深いかわりのある和歌をあげると、ほとんど仏教讃歌である。

浅きこと摩訶退くころぞ起りぬる真俗一諦末の世の為

皆已成仏道

法の花散りにし人はさらずとも今は仏の身とぞ成るらむ

結

『拾玉集』とその他に残された慈円の和歌が約六千首あるという。それだけでも日本文化史上の慈円の評価はすばらしいが、『新古今和歌集』においては入選歌第一位が西行で九十四首、そして、第二位は慈円で九十一首である。いかに慈円が当時の歌壇で重鎮だったかを物語っている。

その六千首のうちで、『拾玉集』に収められた作品のなかから、比叡山・天台寺院・天台教学を直接的に詠んだものを整理すると、比叡山の風景がもっとも多い。つぎが、法華経歌であり、神祇歌・浄土教歌と続いている。

先学の多くは教義と和歌を論じて、文学を軽視し狂言綺語と称し、経論より和歌を一段低く見ている。もちろん和歌を

真言陀羅尼の日本版として反論したものもあるが、こうした立場から慈円和歌を見ると、難しい天台教学を和歌に表現した才能の優秀さを指摘したい。単に、花鳥風月を詠む月並和歌でなく、叡山仏教を和歌に托して、当時の教養人に関心を深めているので、その功績は大であった。

仏教哲学をベースにした慈円の和歌は『拾玉集』で見える限りは、「皆已成仏道」の和歌のごとく、万人が成仏できるという近代思想を高らかに詠んだ。貴族出身でありながら、人間はすべて平等と訴える「龍女成仏」の和歌も詠んだ。さらに、浄土教弥陀信仰をテーマにした和歌は鎌倉時代を先取りしたもののだが、青蓮院門跡と天台座主を兼任した慈円が和歌を通じて天台信仰人口の増加に貢献したのである。

つぎに、神祇和歌が群を抜いて多いのは、日本では仏教も神道も対立せずに融和して、宗教の使命を果すべきだという国民思想を反映したものである。

慈円和歌は慈円の生涯をみごとに描いたもので、和歌に表現された生涯があざやかである。ために、慈円の仏教観の変遷を如実に示している。それが道歌のように、文芸性の劣る作品でなく、和歌のレベルを保ちながら、しかも、仏教、とくに天台仏教を巧みに詠んでいる。

結論的にいえば、貴族出身の天台高僧だから、慈円和歌が当時の歌壇に受け入れられたのではなく、慈円が、まず、和歌

『拾玉集』における叡山仏教（渡 邊）

を作る実力を持って鎌倉歌壇に君臨した上で、叡山仏教を日本文化史に輝く、すばらしい文化遺産『拾玉集』として、後世に伝えたのである。

- 1 校註国歌大系第十卷『御集全 六家集上』九八七頁
 - 2 岩波日本古典文学大系『歌論集 能楽論集』の「後鳥羽院御口伝」一四六頁
 - 3 同上の「為兼郷和歌抄」一五八頁
 - 4 間中富士子著『慈鎮和尚乃研究』九八頁
 - 5 本文中引用の和歌はすべて、校註国歌大系第十卷『御集全 六家集上』の「拾玉集」による。
 - 6 拙稿「中世和歌集における叡山仏教」（印度学仏教学研究二八一）参照
 - 7 間中富士子著『慈鎮和尚乃研究』一五六頁
- △キーワード▽ 比叡山、天台宗、仏教文学
（四天王寺国際仏教大学教授）

新刊紹介

藤田宏達博士還暦記念論集

『インド哲学と仏教』

A五判・一二八六頁・二五、七五〇円
平楽寺書店
（税込み）

平成元年十一月十日刊